

令和5年度 立川市立立川第八中学校 学力調査等の分析

1 令和5年度全国学力・学習状況調査

教科	分析結果（生徒の実態や課題等）
国語	○全体を通しての全国平均正答率は69.8%、東京都72%、本校66%である。 ○「読むこと」の全国正答率は63.7%、東京都67.2%、本校64.7%と、全国平均を1%上回った。 ○「言葉の特徴や使い方に関する事項」において、全国正答率67.5%、東京都69.6%に対して、本校が59.8%と下回っている。これは文脈に即した「漢字」の知識が十分に身に付いていなかったためと分析できる。学習を進めるために必要となる知識を正しく身に付けることが課題である。 ○「我が国の言語文化に関する事項」において、全国正答率74.7%、東京都73.1%に対して、本校が64.7%と下回っている。これは問題文と自身の経験や知識を結び付ける能力が十分に身に付いていないためと分析できる。 ○生徒質問紙の「国語の授業で学習したことは、将来、役に立つと思いますか」という問いに対し、88.2%の生徒が肯定している。
数学	○全体を通しての全国平均正答率は51.0%、東京都は54%で、本校は50%であった。 ○学習指導要領の領域別に正答率をみると、「数と式」では全国正答率は63.0%、東京都は66.0%で、本校は59.6% 「図形」では全国正答率は33.2%、東京都は39.2%で、本校は41.2% 「関数」では全国正答率は51.2%、東京都は54.3%で、本校は47.1% 「データの活用」では全国正答率は48.5%、東京都は50.4%、本校は48.4%であった。 ○思考力・判断力・表現力等を問う問題も知識及び技能を問う問題も、正答率はどちらも全国よりわずかに低い。 ○記述式の問題での無回答率が高く、「論理的に考察し、表現できる力」に課題がある。

2 令和5年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」

	分析結果（生徒の実態や課題等）
	○4 学習の進め方（教科共通）において、昨年度との比較では4(12)で肯定的な回答が7.6ポイント増加。また、4(14)では肯定的な回答が8.4ポイント増加した。これらは、昨年度からの校内研究の成果といえる。しかし、4(11)では肯定的な回答が1.5ポイント減少し、「当てはまらない」の回答は6.7ポイント増加した。教員側は意識して授業改善に取り組んでいる内容の一つなので、生徒との意識の差が見られる。また、各質問との相関関係を見てみると、4(14)～(16)は、その他の質問項目との相関関係が強い。反対に、4(9)～4(11)とは、相関関係が弱い。 ○10 学習習慣（学習塾や家庭教師による学習等を含めない）においては、特に10(5)と4 学習の進め方（教科共通）に相関関係が強い。

3 令和5年度「東京都児童・生徒体力・運動能力、生活・運動・習慣等調査」

教科	分析結果（生徒の実態や課題等）
保健 体育	○新体力テストの結果から、反復横跳びの成績がよく、敏しょう性が高いことが分かる。 ○また、全学年で、持久走の成績が悪く、全身持久力に課題があることが分かる。加えて、ハンドボール投げの結果も低い生徒が多く、巧緻性にも課題が見られる。 ○持久走については、苦手意識の強い生徒が多いこと、ペースが分からず全力を出し切れずに終わってしまっている生徒がいたことが、今回の結果の要因ではないかと考えられる。ハンドボール投げについては、得意な生徒と苦手な生徒で結果が二極化しており、苦手な生徒については、体の使い方が身に付いていない様子がよく見られた。 ○生活習慣について、夜更かしをしている生徒が多く、そのほとんどがスマートフォンの長時間使用によるものだった。

4 東京ベーシック・ドリル

教科	分析結果（生徒の実態や課題等）
数学	○1年：平均正答率は48.8%であった。小学校学習指導要領（平成29年告示）の領域別にみると「A数と計算」では正答の割合が比較的高く、「B図形」、「C変化と関係」、「Dデータの活用」では正答の割合が低いので、これらの分野を伸ばすことが今後の課題である。 ○2年：平均正答率は60.4%であり、立川市の63.0%よりも下回る。 正答数の四分位数別にみても、第一四分位が本校は8.5で立川市は9。第二四分位が本校は11で立川市は13。 第三四分位が本校は13で立川市は16である。全てが下回っており、様々に課題があることが分かる。

5 定期テスト

教科	分析結果（生徒の実態や課題等）
国語	○真剣に取り組み、答えようとしている。 ○設問に対して書かれている内容を正しく理解し、適切な答え方を考えさせる必要がある。 ○普段の学校生活における継続的な学習習慣や、家庭学習の取り組み方に個人差がある。 ○歴史的仮名遣いなどの古典に関する内容や、文章中での適切な漢字の使用など、知識の定着に課題が見られる。 ○思考を必要とする問題に、取り組む前から諦める傾向がある。粘り強く正解を導き出そうとする姿勢に課題が見られる。
社会	○定期テストに向けた学習では、意欲的に取り組み、用語を覚えて答えることは概ねできる。知識を基に、思考し、文章化して表現する問題には苦手意識がある。 ○知識を問う問題では、多くの生徒が重要語句を覚え、正答率が高くなっている。一方、資料から読み取れることを表現したり、事象の背景を説明したりする問題を苦手とし、正答に結び付かない生徒が散見される。 ○単元の基礎的な知識等が定着していない生徒も若干名おり、知識定着の二極化が課題である。
数学	○1年：基本的な計算や知識は身に付いている生徒が多い。一方で、思考・判断・表現に関する問題の正答率は低く、数学的な思考力を育成していくことが今後の課題である。 ○2年：基本的な計算や技能は身に付いている生徒が多い。一方で、思考・判断・表現を問われる問題の正答率は、習熟度別授業のクラスによって、正答率や無回答率に大きく差がある。習熟度に応じた学習内容の定着が課題である。 ○3年：基本的な計算問題（四則演算、方程式を解く）等の知識・技能に関する正答率が高い。しかし、思考・判断・表現に関する問題の正答率は低く、数学的な思考力を育成していくことが今後の課題である。
理科	○用語などの基本的な知識の定着がみられる生徒は、学年が進むにつれて多くなる。 ○どの学年でも、実験や観察の結果から考察することや、知識を基に文章化する問題に対して苦手意識がある。 ○定期テストに向けた学習や課題で、用語を覚えることに取り組む生徒が多いため、知識・技能を問う問題は、正答率が高い。一方、説明を求められるような問題では、表現が不十分な解答をする生徒が多く見られる。
音楽	○歌唱など実技を伴った活動についての解答は、多くの生徒が正解している。その一方で、鑑賞教材、楽典、簡単なリズム創作などは、テスト前の取り組み方によって差が生じている。 ○授業で積極的に表現活動ができるようになると、定期テストに対しても意欲的に行えるようになるという傾向が見られる。 ○授業でのグループワークなどを通して、生徒同士で意見を共有し、全体の底上げを図る。
美術	○各学年の試験問題正答率と状況分析 [1年]：思 60.5%・知 63.7% [2年]：思 68.8%・知 71.0% [3年]：思 55.3%・知 51.6% ○思考力を問う記述問題に対しては、苦手とする傾向が見られるが、正解ではなくとも自分なりに苦心して答えようとする粘りも見られた。また、知識を問う問題については、誤字が頻繁に見られるため、授業での丁寧な確認が必要である。 ○鑑賞に関する能力を高めるために、作品を互いに鑑賞する機会を多く設定する。
保健 体育	○技能の名称など、知識を問う問題では、記述式と記号式で正答率に差があり、意味や背景を関連付けて覚えられている生徒が少ないと考えられる。 ○思考・判断・表現の問いでは、記述できる生徒が昨年度より増えた。日ごろからプリントや学習カードに記入する習慣がだんだんと身に付いてきた成果ではないかと考える。 ○主体性を問う問題では、二極化が見られ、自己分析が苦手な生徒はあまり答えられていない印象であった。プリント等で自己の課題を振り返る習慣付けを行い、正答率のアップを図る。
技術 家庭	○定期テスト前の学習の取組に差があり、基本的な事柄について答えられない生徒も見られた。 ○1年生は初めてだったからか定期テスト対策ができていない生徒が多かった。 ○思考・判断・表現、主体的学習態度の記述式の問題はよく考えしっかり答えられている生徒が多かった。 ○授業での真面目な取り組みが得点に結び付いていない生徒が多いので、テスト前の学習時間を確保させ得点アップを図る。
外国語	○1年：単語のつづりに間違いが目立つが、英文の概要を聞き取ったり読み取ったりする問題では8割が正答した。書くことは繰り返し練習が引き続き必要である。英作文問題では、文法のミスはあるが、相手に伝わるように具体的に説明しようとしたり、たくさん文を書いて思いを伝えようしたりする回答が多くあった。知識・技能の定着に課題が見られるが、英語で表現することに対する高い意欲を削ぐことのないよう指導を工夫する。 ○2年：長い単語のつづりにおいての間違いが見られ、反復練習の程度によって結果に差が出ているように思われる。適語補充や書き換えの問題では、短縮形や時制等総合的な知識が求められるため、既習事項を振り返りながら、新しい文法を身に付けていく必要がある。読解問題での指示語の理解や自分の立場で答える英作文問題においては、徐々に定着してきている。今後、日常生活に即した言語の使用場面を提示し、表現力の向上に向けて指導を工夫する。 ○3年：聞くことと読むことにおいては知識・技能を問うものも思考・判断・表現を問うものも正答率が高い。一方で読むことにおいてはどちらとも正答率が低い。引き続き、コミュニケーション活動を通して文法の練習を行い、聞くこと・話すことだけでなく、書くことまで定着できるようにする。